

水戸の梅花道

今年(2009年)の水戸の梅祭りも終わり、季節の主演は桜に変わっています。

小生は、今春から会社仕事を離れたことにより、これまでに無いスタンスで観梅を行いました。私たちの近くでは観梅と言え、水戸の偕楽園と弘道館が有名で、ここに2月14日から3月29日の間に8回足を運びました。

ところで梅花道という言葉は今年の梅祭りのパンフレットに書かれていたもので、茶道、華道のように作法を決めて梅を深く観賞することのようです。パンフレットにあるお点前(作法)は以下の通りです。

- その1 門前で居づまいを正し、心を静める。
- その2 まだ朝霧の残る園内に足を踏み入れる。
- その3 梅林の全体をゆっくり目で追う。そして木立の小道を歩き、その息吹に触れる。
- その4 枝先に目を落とし、一輪一輪を愛でる。百品種のじつに美しい表情を見極める。
- その5 古木を探す。地面を這うような幹、優雅な曲線を描く幹、黒く輝く樹肌、臥竜梅、鉄幹と呼ばれるもので、時の流れ、生の鼓動に出会える。
- その6 そして、そっと清楚な花々に近づき深呼吸……。ふくいくとした香りが体の隅々に流れ、
至福の喜びを味わう。
- その7 門を出、心静かに時を楽しむ。

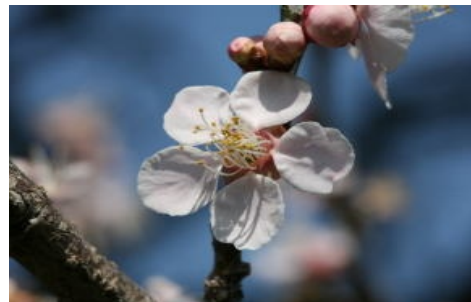
私は、上記お点前全体を通して行うことは出来ませんでしたが、その趣旨を汲み取って梅を見るように努めました。すなわち、梅林全体を見た後個々の花の美しさや香りを楽しむ。古木にも目を向けてその木の歴史を考えると同時に"無常"について考える。

まだ梅まつりも始まっていない2月14日、最初に弘道館に行きました。弘道館の梅林は偕楽園のそれよりも規模は小さいけれど、静寂性があり、品位が高いように感じます。ここの梅林は弘道館の白壁の中と外の2箇所があり、どちらにも立派な梅の木がありますが、私は白壁の中の梅の方が好きです。白壁の中の梅は梅林というよりも弘道館の庭という位置づけが正しいと思います。

早咲きの梅を訪ねることを探梅というようですが、この時期既に多くの梅が開花していました。梅園に足を踏み入れるとほのかな香りが漂い、春を実感できます。水戸の六銘木といわれる柳川枝垂れや烈公梅などを含めて多くの種類の花が咲いていました。六銘木のうち一重のものが、烈公梅、月影、柳川枝垂れの3種ですが、このうち私は烈公梅が好みです。その理由はまず烈公は弘道館や偕楽園を作った藩主であり、その名前の響きがよいことです。次に5枚の花弁が離れていて、それぞれの個性を主張しているように見えます。また花弁が離れているため中心部の紅い萼とのコントラストも私の好みに合います。個々の梅の香りは私の臭覚の精度では区別がほとんどつきません。



写真1 弘道館正門と白壁越しの梅

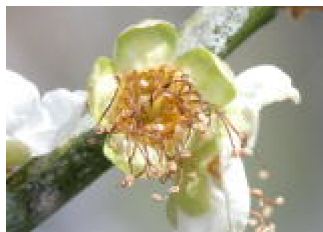


烈公梅(水戸六銘木)

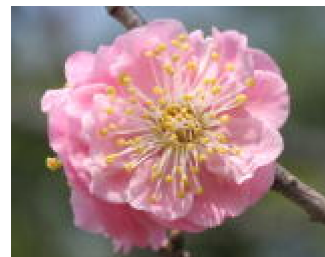
偕楽園へ行くときは、私は桜山駐車場に車を止めて梅桜橋を渡って入ります。この橋を渡ると小さな池があり、ここから左方向に坂を上がると吐玉泉、孟宗竹林、通って表門を入った所に出ます。こちらを回ると、梅林に入った近くに水戸の六名木が多く植えられています。六銘木は六角形の柵で囲われていて、観梅者にわかるようになっています。しかしながら柵で囲まれていない六銘木がたくさんあります。何度も足を運ぶとどこに何の種類があるか、また私のように写真に興味のあるものには、どこの木が写真を撮り易いかなどの情報も段々と判ってきます。また写真を撮っていると観光客から良く"これは何と読むのですか"と聞かれることがあります。この間は"見驚"という名板の読みを聞かれたのですが、そのときは私の知識は無かったこと、近くにボランティアガイドも居なかったことから、あいまいな答えになってしまいました。あとで偕楽園ホームページの梅図鑑を見たところ「けんきょう」が正しい答えでした。私は地元住民として正しく対応できなかったことを反省しています。



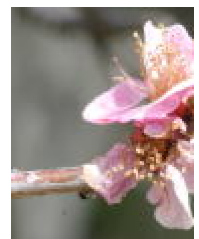
月影(盛り)



月影(萼)



江南所無(盛り)



江南所無(咲)

今年は梅の花の盛りだけでなく、咲き終った花にもカメラを向けました。偕楽園には100種類の梅の花があるようですが、深く観察してもその違いが判りにくいものがあります。種類分けはまず一重と八重の違い、花弁や萼の色や大きさ形、蕊の色や形、大きさなどの差によって決めているようです。これらの花の特徴は咲き始めと咲き終わりでも違ってきます。花弁はたいてい萼を残して散るため、このとき萼を観察すると、その特徴が良く判ります。

偕楽園や弘道館には古木もたくさんあり、中でも目につくのは臥竜梅です。この梅の特徴は竜が横たわったように見える幹の部分ですが、この部分と梅の花の表情を合わせて撮ることがなかなか出来ませんでした。この点は来シーズンの課題としたいと思います。もうほとんど生きていないのではないかとと思うほど朽ちている古木が、若い木と同様の、綺麗な花を咲かせているのを見ると、思わず尊敬してしまうというか、手を合わせたくするような気分になります。中にはついに花を咲かすことが出来なかった古木もありました。さらに切り取られたものもあって、その切り口が深く心に残りました。



臥竜梅(弘道館)



古木の切り株



池に落下した花弁

偕楽園の梅は門の外、すなわち千波湖により近い部分にもたくさんあり、こちらには新しい品種の梅も見られます。偕楽園の梅はその品種と規模を増やしつつあるようです。偕楽園が開園されてから今年で167年と計算されますが、これから100年後に平成の時代に植えられた梅林で人々が皆楽しむ事が出来れば素晴らしいことだと思います。

私は、こちらの梅林と好文亭とを組み合わせた写真が好きで良くシャッターを切ります。好文亭は偕楽園の象徴だからでしょうか。



紅梅白梅と好文亭



偕楽園公園から田鶴鳴梅林、好

2009年4月9日